

書きは読みに習熟してから

「漢字を書く指導は、いつ、どのように行なうか」もよく尋ねられる問題です。明治以来、漢字教育は“読み書き同時”、並行して学習させることになっています。

しかしわたしは、“読み書き分離”“読みを書きよりも先に学習させる”という考え方をとっています。

“読み”と“書き”とは、赤ちゃんの“はいはい”と“あんよ”との関係に似たところがあります。“はいはい”することによって“あんよ”の力がついていくことです。つまり、“読み”に習熟すれば、字形の認識が自然に深まり、書きの学習に移った場合、“書き”の学習が容易になります。ですから、“書き”を急がず、まず“読み”の学習を十分にせよ」という考えです。

読み書き同時の学習は、はいはいのできない赤ちゃんがあんよさせられるようなもので、字形についての認識がまだできていないのに書かせられるものですから、苦勞ばかり多くて、書く力はつきません。いまの学校教育では、読み書きを並行して進め、これを同時に完成させようとしていますが、これはそもそも無理なこと、不可能なことを要

求しているのです。しかも、こういう学習を強制していると、漢字嫌いになって、漢字力は身につかず、果ては勉強嫌いになってしまう恐れがあります。

書きについては、どこの学校でも、書き取り練習というのをやらせています。一ページに同じ字を何回もくり返して書かせていますが、書くのに意欲が出ませんから、なかなか書く力はつきません。それに、この書き取り練習は、その漢字が初めて出てきたところでやるだけで、あとはさっぱりやりません。これではその時は書けるようになって、しばらくすればすぐ忘れてしまうだけです。

昭和44年3月10日、東大名誉教授阿部吉雄博士が、わたしの唱える“読み書き分離教育”を国語審議会に提案したところ、これに対する支持と反対とをめぐって白熱的論争が行なわれた、と新聞が報道しました。その後4月22日、朝日新聞では「漢字教育、どちらが有効か」という論争を特集し、この読み書き分離論をめぐって、議論が戦わされました。今までだれからも考え出されなかったこの考え方が、今、学者ばかりでなく、学校の現場においても真剣に検討されています。